
旋律を奏でて

侑真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋律を奏でて

【Zコード】

N9733E

【作者名】

侑真

【あらすじ】

宏紀はいつも昼休みに一人で居なくなる荒井の行き先が気になっていた。普段から人を寄せ付けない荒井と話すこともできないまま生活を送っていたある日、ふとしたことで彼の行き先を知ることになりました……

第一樂章 Scuriosity

4時間目終了のチャイムが校内に響いた。起立、礼を形ばかりにすれば、生徒達は弁当を片手に思い思いに移動する。
僕、やまなかひろき山中宏紀もいつも通り鞄から弁当を取り出して、教室の後方の片隅に集まっている男子の輪に加わった。

椅子に座りながら、視線を窓際に移す。

チラリと荒井勇人あらこよしとを盗み見ると、彼はいつものように片手に鞄を持ちながら、そそくさと教室を抜け出していくところだった。
この春、高校2年に学年が上がり、僕と荒井は同じクラスになつた。しかし、もつまる3ヶ月経つといつにこ、僕は彼と一回も話したことが無い。

荒井は背が高く、顔も整っている。少しクセのある黒髪は男にしてはちょっと長いが、彼の持つワイルドな雰囲気にとってもよく似合う。いつも一人で無表情のまま机に向っているうえに、他人から話しかけられても大して返事もしなければ、表情も崩さない。言つてしまえば無愛想なのだ。

そして、荒井は毎日4時間目が終わるとどこかへ消える。クラスメートとの関わりはゼロに等しい。影で騒いでいる女子は結構居るようだけど、彼自身は気付いていないようだった。

そういうわけで、荒井がなんとなくクラスから孤立するまでに時間がかからなかった。

そんな彼を盗み見ることが、いつの間にか僕の習慣になつていた。一体、どこにいくのだろうか。

「今日何して遊ぶ？」

ふいに左から声がした。視線を声の方に向けると西村だった。もぐもぐご飯を口の中いっぱいにほお張りながら、首を傾げている。
そうだなあ といながら、僕は弁当箱を開いた。

「何でも良いけど、できれば」

「室内で、でしょ？」

分かつてゐよ、と言つかのよつに結城が僕の言葉を奪つた。結城と西村はいつもつるんでいる友達だ。

「宏紀は色白だからなあ。日焼けすると真つ赤になっちゃって大変だもんな。」

茶化すように西村が言った。

「すみませんねえ……、軟弱で。」

僕は少しムツとして、西村をにらみつけた。

「軟弱だなんて思つてねえよ? だつてお前、見かけにようじず剣道強いじやん。」

へラへラと笑いながら西村がフオローにもなつていらない言葉を吐いた。

見かけによらずつてなんだよ!!

内心面白くないながらも、実際その通りなのだから仕方が無い。母親譲りの色白で全体的に色素が薄い。そのうえ体格もあまりヨロシクナイものだから、やれ軟弱だの、やれ貧弱だと散々言われ続けてきた。

「まあ、昨日は雨降つてグラウンドべじやべじやだもんね。体育館の方が無難でしょ。」

ね?と、結城が同意を求めるように僕の方に顔を向けて微笑んだ。結城はさり気無く気遣いの出来る良いヤツだ。西村にも見習つて欲しいものだ。

「そうだな。最近雨多いもんな。」

梅雨なんか早く終わればいいのに、と西村は窓に眼を向けながらポソリといった。

夏が来たら来たで、炎天下よ早く去れ!と思つのだが、このじめじめした空気はあまり好きではない。じつとりとシャツが肌にへばりつく感じがどうも苦手だ。

さつさと昼食を食べ終えると、僕達は体育館へ向つた。

「今日はバスケだよな！」

「え、これ以上汗かくの！？」

やだよ、と僕が文句をたれていたとき、ふと荒井らしき人物が視界に入った。

本館から体育館に続くこの渡り廊下はガラス張りで、校舎の中間あたりの3階にある。だから、ここからは他の階の教室の中が見えることもあるのだ。

僕の視界に入った荒井であろう人物は、同じ階の3階にいた。

見かけた窓のある教室は、一体なんの部屋だつただろう……。僕の好奇心が頭をもたげ始めてしまった。

気になる。すつごく気になる。

どこにいるのか全く分からぬならここまでの興味は持たないがあと一步で分かる位置に来ているのだ。気にならないわけがない。

「宏紀、なにしてんだよ。ぼーつとつたつてんなよな。」

「あ、ごめん！僕、ちょっとトイレ！」

言つが早いか僕はもう彼らに背を向けていた。そつちにトイレは無いぞーという西村の声を背中で聞きながら、僕は全速力で走った。来た道を戻り角を曲がる。そのまま一直線に駆け抜け、目当ての教室の前に来た。

「ここだ……。」

肩で息をしながら、頭の中で計算をする。あの位置から見えるのは、こここの教室のはず。しかし、僕はどうしても信じられなかつた。

だつて、この教室、音楽室なんだ。

第一樂章 ↗ surprises ↗ (前書き)

荒井の行き先が気になっていた宏紀は、
その場所を突き止めるチャンスを手にした。

彼の行き先は意外な場所だった。

第一樂章 ↴ surprises

何で音楽室？

疑問を抱きながらもそのドアノブに手をかけた。防音の整つたその教室の扉は重く、開けると中から涼しい風が吹いてきた。

と、同時に音が聞こえる。

ピアノだ。

僕はある種の期待を胸に抱きながら、音を立てないよう慎重に入り扉を閉めた。幸い弾き手はまだ気付いていない。

緊張してゐるのだろう。自分の心臓の音が分かる。

扉の位置からだと顔が見えないため、僕は弾き手の顔が見える位置まで身を低くして移動した。

やっぱり荒井だ。

荒井は力強くも、どこかもの悲しげな、そんな音を奏でていた。

彼の指が器用に走る。

普段の姿からは想像できないほどの激しい音。切ない音。そしてどこか孤独な音。

今弾いてる曲は聞いたことがないけど、僕は一瞬でそれを覚えた。それくらい強烈だった。

冷房の効いた部屋の中で、縮こまりながら荒井の音を聞いていた。汗を吸つたシャツが少し冷たい。

荒井の演奏が終わる、と同時に僕はやらかした。

「へくしゅつ！」

「！？」

ガタン、と音を立てて荒井は立ち上がり僕を確認した。眉間にしわがより、明らかに不機嫌だ。その眼に射抜かれて、僕は一步後ず

さつた。

「……いつから?」

「え、つと、2・3分くらい前かな?」

「ごめん、サバよんだ。本当はもつといふと思つ。

「なんでここに?」

当然の質問だ。音楽室なんて滅多に人が来ない。

まさか、荒井を追つてきました、なんて言えるはずもなく、僕は苦し紛れに「冷房を少々……」と答えた。

その答えにため息をつきながら、彼はピアノに向き直つた。何事も無かつたかのようにまた弾き始める。どうやら居てもいいらしい。出て行けと言われなかつたことが嬉しくて、僕は少し荒井に近い席に座つてみた。

ちょっとだけ精神的に近づけた感じ。きっと誰もこんな彼の姿を知らないんだろうなあと思うと、なんだか優越感。

僕は音楽のことなんて全く分からぬけど、それでも荒井が上手いことは分かつた。

大きい身体で纖細な音を奏でるその姿は、ミスマッチなような気もするけど、なぜか僕を安心させた。

次々と弾かれる曲の中でやつと僕も知つてゐる曲が流れた。曲名は知らないけど、CMとかでも使われるようなちょっとポップなやつ。軽くリズムを足で刻んで、鼻歌を歌つてみた。自然と身体が揺れる。楽しくてふわふわした感覚。

ふと視線を感じて荒井のほうを見ると、視線が交わつた。そして彼は、柔らかく笑つた。

本当に柔らかく。

一瞬、僕は何が起きたのか分からなくなつた。

荒井が笑つた?

僕の心臓はさつきの比ぢやないくらいドキドキし、結局その曲の後半は全然耳に入つてこなかつたんだ。

第一樂章 ~surprise~（後書き）

今日は短くなりましたが、大事な部分が書けました。
次回はもう少し進展が欲しいです。.

ここまでお読みくださつて有難うござります。
ご意見・ご感想など頂けますと、嬉しいです。

第二樂章 ~coming closer~（前書き）

荒井の行き先は音楽室だった。

宏紀は荒井の音・姿に衝撃を受ける。

あの音楽室での一件以来、僕はますます荒井を意識するようになつてしまつた。

授業中もいつの間にか視線を向けていりし、放課後も彼の行き先に思いを馳せた。

またあのピアノが聞きたい。あの姿を見たい。

その思いは日に日に強くなる一方だつた。

そして一週間経ち、とつとう僕は行動に出る決意を固めた。

「荒井！」

今日もいつものように教室から出て行こうとする荒井を、僕は決死の覚悟で呼び止めた。

「あ、あの、あのや。」

声が上ずる。手は汗まみれだ。

こちらを振り向いた荒井は、かすかに首を傾けた。

「きよ、今日、行つても良いかな？」

「……」

沈黙。

やつぱりダメか、と肩を落としていると荒井が口を開いた。

「昼飯食べてから来い。」

僕は大きく2・3度首肯し、声を弾ませて言つた。

「うん、ささつと食べてすぐ行くからー。」

荒井は少し驚いた顔をし、舞い上がっている僕を見て苦笑したようだつた。

また後で、と挨拶を交わして、弁当を食べるために西村と結城のところまで行つた。

「なあにーヤついてんだよ？」

僕がお弁当を持って近寄ると、西村が声をかけてきた。

「へへへー、ないしょー。」

弁当の蓋を開けると、珍しく手作りだった。今日は良い日かもしれない。

「荒井と話してたよね？」

「ん？ まあね。」

よく見てるなあ、と思いつながらも結城の質問を受け流す。

「仲良かったの？ お前ら。」

なにやら質問攻めだ。僕は仲が良いつてほどじゃない、と言つながらじ飯を搾き込んだ。

さつさと食べて音楽室に行くんだから。

もしやもしやと食べる僕を見て、二人は首をかしげた。

「内緒なの？ アヤシーなあ。」

薄く笑いを浮かべて、言いたくないなら良いけどさ、と繋げながら結城はパンをかじる。

「アヤシーって、おい。」

そんなことはないと弁解をし、おかげで手を伸ばしたが、二人はまだ何か言いたそうだ。

だつて仕方ないじゃないか。言つて良いことなのか分からないし、荒井の許可も取つてないし。

胸のうちで言い訳じみたことを並べても意味はないし、本音はやこじやないことは既に分かつてた。

ただ単に、一人だけの秘密みたいで、それを壊したくなかったんだ。

「で、今日は荒井と昼休みを過ごすの？」

西村が嫌な言い回しをする。なんだか心のうちを読まれてるみたいで落ち着かない。

「うん、今日は、ね。」

言いながら、食べたお弁当箱を片付ける。

片付けている僕を見て、少し落ち着けば?と西村が笑つた。

そんなに浮き足立つてゐるのかとちよつと恥ずかしくなりながら、僕は一人とわかれ音楽室へ向つた。

音楽室のドアノブに手をかける。前よりも緊張してゐるみたいだ。相変わらず重たい扉を押し開くと、今日もよく冷房が効いていた。荒井の邪魔をしないようにと静かに入つたつもりだったのに、曲が止まつてしまつた。

「ごめん、お邪魔します。」

荒井が僕を見て、軽くうなずいた。そしてまた指は鍵盤の上を躍りだす。

一週間ぶりの荒井の音はやつぱり素敵で、僕の心を静かにさせる。僕はこの前と同じ席に座つて彼の弾く姿を見ていた。
どうしてか、ピアノなんて女子が弾くものだ、といつ変な偏見が僕にはあつた。

でも、荒井のその姿はそんな偏見を一瞬にして吹き飛ばす。

性別とか、体格とかそんなものは関係なくて、大事なのは好きなものに真摯に向き合つてゐるかどうかなんだな、って思える。

ちょうど僕の剣道のようなもの。

小さくても筋肉の付きが悪くても、剣道が好きだつて言ひ気持ちと努力があれば、しつかり上達できるのだ。

僕が荒井の音楽に惹かれたのは、こつこつこと原因の一つなのがもしれない。

三曲ほど弾き終わると、荒井は一いちらを見た。やっぱり邪魔だつたかな、と不安になる。

「退屈じやないのか？」

思いがけない質問に僕はギクマギした。そして首を思いつきり振つて否定する。

「そんなことないよ！ 聞いてるだけでいいんだ。」

パタパタと手を顔の前で振る僕を見て、そつかと呟くと、彼は何かを思案してゐるような顔つきになつた。

そしておもむろに口を開く。

「弾いて欲しいものはあるか？」

「え！？いいの？」

彼の予期せぬ質問に僕は立ち上がりかけた。衝撃だ。

でも、僕は音楽には疎くて、ピアノの曲なんてよく分からない。しかしここで、やつぱりいいですなんて勿体無くて言えるわけがなかつた。

どうしようかと逡巡して結局ティーズニーの曲にした。悲しいかな、

僕の貧相な頭ではこれが精一杯。

荒井は一瞬、嫌そうな顔をしたような気がしたけど、それでも弾いてくれた。

たまに間違えながら。

あれ？って顔をしてる荒井を見てるのが楽しくて、僕はあれやこれやと次々に弾いてもらつた。

予鈴がなるまでの間、荒井は僕に振り回され続け、チャイムを聞いてホッとした顔をした。

音楽室の鍵を掛け、職員室に鍵を戻す。そして教室に続く階段を上つているとき、荒井が口を開いた。

「毎日あそこにいるから。」

暇なときは来い、と。

思わず言葉に僕は、立ち止まつてしまつた。

階段を上つていた荒井が、僕が立ち止まつたことに気付いて振り返る。

視線が交差する。

「行くぞ。」

そう言って、荒井は僕の頭にポンと手を置いた。

大きな手。この手であんな綺麗な音を奏でるのか。

僕の頭から離れたその手を、僕は名残惜しい気持ちで見つめていた。

第二樂章 ~comme c'est une~ (後書き)

「ううじょ、…少しあ近づけたかと思こま。」

「樂章」の距離を近づけていきたいです。

「お読みくださりありがとうございます。」

「意見・感想など頂けますと、嬉しいです。」

第四樂章 ~unexpected~ (前書き)

音楽室に来ても良いと、許可をくれた荒井。
彼の存在はますます宏紀の中で大きくなつていく。

第四樂章 S un e x p e c t e d

それからとこつもの、僕は暇を見つけては音楽室に通りよつになつた。

会話も比例するよつに増え、彼はだんだんと自分の話もするよつになつた。

親・兄弟の話、中学時代の話、音楽の話。

他愛のない話ばかりだけど、僕は荒井と話せることが嬉しくて仕方がなかつた。

でも、たまに見せる笑顔はやつぱり僕の心臓に悪いよつで、毎度毎度ドキドキしてしまつ。

これには当分慣れそうもない。

荒井は放課後も音楽室に通つてゐるらしい。

僕が部活で外周を走つてると、窓を少し開けているのだろうか、音が微かに聞こえてくる。

走りながらも、その音が聞こえないと嬉しそうな安心するよつな気持ちになる。

ほぼ毎日ある剣道部の練習は、体力作りも多く結構きついけれど、ピアノの音に背中を押されるようにして僕は足を進めていた。

七月も半ばになつたある日、部の練習も終わり、滝のよつに流れる汗を手ぬぐいで拭いていると、体育館の入り口に荒井を見つめた。

「え、荒井？」

僕の声で部員達の視線を受ける荒井。にわかに体育館内がざわめく。

荒井はそんな部員達の視線など氣にも留めない様子だ。僕は、平然と腕を組み壁にもたれかかる荒井に駆け寄つた。

「どうしたの？あ、ゴメン、汗臭いよね。」

2・3歩後ずさると、荒井が僕の手首を掴んだ。

「いや、平氣だ。」

こんなに防具臭いのに??

いえ、僕が平氣じやないです。と言いたいのだが、手首に神經が

集中してしまい上手く口が回らない。

硬直する僕には気付かず、荒井はそのまま続ける。

「あとどの位で終わる?」

「え、つと、シャワー浴びたいから、あと一-five分くらいかな。」

「じゃあ校門で待ってる。」

それだけ言うと荒井はスタスターとその場を離れてしまった。

呆然とする僕に、部員からのしつこい質問攻めが待っていたことは言つまでもない。

部員達を撇いて僕が校門に着くと、荒井が言葉通りそこで待っていた。

「『』めん、遅れた。」

僕は駆け寄って、ペコリと頭をさげた。その頭を大きな手がポンポンと叩く。

この行為にも慣れない僕は、赤くなつた顔を見られないように少し俯いて話す。

「帰ろつ。」

僕の変化に気付いていない様子の荒井は、駅までの道を歩いていく。

いつもして一緒に帰るのは初めてのことだった。

並んで歩く道は、いつもと同じなのにどこか違う。

一つの影が西日に照らされて伸びていく。

横目でチラリと荒井を盗み見ると、彼は前をまっすぐ見つめていた。

端正な顔が夕日に照らされて、まるで絵のよつだ。

視線に気付いた荒井が、じちを見る。と同時に僕は田を逸らし

てしました。

何だか恥ずかしかつたんだ。
隣で首を傾げるような気配がした。

「…山中。」「

ふいに名前を呼ばれ、僕は彼の顔を見た。

「これから家に来ないか?」

「え?」

僕は田を白黒させた。だつて急ぎやしないか。

「無理か?」

「無理…じゃない…。」「

でも、なんで急に?」

「じゃあ、行こうか。」

僕の疑問はお構いなしに、荒井は改札をくぐる。

僕は慌ててその後を追つた。

正直、荒井が家に呼んでくれることまことに嬉しかった。

彼が心を開いてくれている証拠だからだ。

でも言葉少なな荒井の目的がどうしても分からぬ。

僕は期待と不安のジレンマの中、荒井の家へと向ひ電車に揺られていた。

第四樂章 ~unexpected~ (後書き)

いじまでお付を貰ひ頂き、有難ひござります。

音楽室から舞台を変えていじつと思ひます。

そろそろ宏紀に「荒井が好きだ」とか言わせたいんですが…
まだいえそうもありません…。

ご意見・ご感想頂けたら嬉しいです。

第五樂章 ~kindness~（前書き）

部活帰り、荒井に誘われて帰り道を一人で歩いていた宏紀。「家に来ないか。」という荒井の唐突な誘いを、戸惑いながらも承諾したが……。

普段とは逆方向の電車に揺られること約二十分。

学生の帰宅時間にかぶつてしまつたため、車内はやや混雑気味だ。荒井は腕を組み、窓から外を眺めている。西日がまぶしい。

僕はそんな荒井を見ながら、これから起こり得ることの可能な限りを考えた。

考えに考え、でも僕の貧相な頭では、それらしいものが浮かばない。

夕飯にご招待？いやいや、まさかそんなことは……。

そんな考へが頭の中をぐるぐるしている。

あーでもないこーでもない。僕が悶々としていると、荒井がこちらを見た。

「次、降りるわ。

僕が頷いたのを確認すると、荒井はまた窓へ視線をやつた。僕は余計に緊張してきて、掌が汗ばむのを感じた。

プラットホームが見えてくる。

電車の動きがゆっくりになる。

動きが止まり、開いたドアへ荒井が進む。

僕は置いていかれないように、彼の後を追つた。

普段降りることのない駅は新鮮で、僕はキヨロキヨロと辺りを見回した。

自分の家の最寄り駅よりも拓けてるそこは、バスのロータリーや、ショッピングモール、ファストフード店など様々なものがあった。

落ち着きのない僕を見て、荒井は少し笑つたようだった。

僕は恥ずかしくなり、荒井の視界から外れるよう、彼の少し後ろからついていく。

「人、多いから気をつけて。」

荒井が後ろを振り返りながら言つ。

「うん、大丈夫。」

ありがとうと付け加えて、僕は暗くなりかけている道を進んだ。駅から十分くらい歩いたのだろうか。

ようやく荒井の家に付いた頃には、日はもう暮れてしまつていた。真っ白な壁に、オレンジの暖かそうなランプが灯つていて、何だか絵画の世界みたいだ。

「どうぞ。」

荒井がドアを開け、招き入れてくれた。

「お邪魔します……。」

恐る恐る足を踏み入れる。なんだか緊張する。

広めの玄関に靴を置き、出されたスリッパに履き替えると、荒井の後を追い階段を上つた。

洋風の荒井の家は、とても綺麗で、絵画や花が置かれている。これだけで既に僕の家とは大違いなのに、階段を上つて僕はさらにな驚いた。

「ピアノだ！」

大きな部屋にピアノが一台置いてある。しかもその部屋は防音らしい。

「こんな部屋で毎日弾いてたら上手くなるよね。」

感嘆混じりに呟くと、隣で荒井が肩をすくめた。

部屋には沢山の戸棚があり、中には様々な本が入つていた。どれもこれも音楽にまつわるものだった。

僕が珍しそうに戸棚を見ていると、荒井が手招きをし、戸棚の中を見るように勧めてきた。僕は彼の隣に寄り、その中を見てみた。

「あ！」

思わず声を発した。

その中には沢山のディズニーの楽譜があつたのだ。

以前、僕が弾いてくれと頼んだことを覚えていてくれたらしい。

「ijiに有るのは全部練習した。」

「ほんとに！？」

あの時、弾けなかつたものも有り、彼が新たに楽譜を揃えてくれたのは一目瞭然だつた。

荒井の気持ちが嬉しくて、僕は彼に“ありがとう”を浴びせるよう連呼した。

そんな僕を見て初めは目を丸くした荒井だが、すつと目を細めて笑つた。

「良かつた、連れてきた甲斐があつた。」

そしてまた、頭にポンポン。

僕の顔は、嬉しいやら恥ずかしいやらで真つ赤になつていただろう。

田を細めて微笑した荒井は、袖を捲り上げてピアノへ向きあつた。おもむろに指を動かす荒井。音が跳ね踊る。楽しげな音楽が彼の指によつて作られていく。

どうやら、荒井はこれを聴かせるために僕を連れてきたようだ。キラキラ光る音の中、僕のために弾かれるそれをこそばゆい思いで聴いていた。

一曲弾き終わると荒井が手を差し伸べてきた。そして手招きをする。

何を要求されているのか分からず、とりあえず近くに寄つてみた。

荒井がまた手を差し出したのにつられて、僕はその手を握つた。

「……！」

途端に荒井が僕から田線を外して、くつくつと笑い始めた。

「な、なんで？僕、何か間違えた！？」

不安と恥ずかしさでオロオロと狼狽える。変な汗まで出でてきた。

「ただ俺は……。」

荒井は田につすらと涙を浮かべながら、笑いを噛み殺している。

「好きな楽譜を寄せせて……。」

楽譜？そういうことだったの！？

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！！

「ま、間違えた。」

この部屋のどこかに穴は有りませんか？

僕はその場でうんうん唸りながら、頭を抱えて座り込んだ。

「山中……、お前って天然？」

ようやく笑い終わった荒井が僕の顔を覗き見る。

わりとしつかりしてゐるのかと思つてたのにな、なんて言いながら僕の頭を撫でる。

なんだかますます恥ずかしくなってきた。本氣で穴を掘りたい気分。

でも、あんな風に笑つてる荒井ってなかなか見る機会がないから、ちょっと得したかも。

と思わないと救われない。

その後、思い出し笑いをする荒井に、僕は文句を垂れたのだった。

荒井がちゃんと喋れば良かつたんだろ！
つて。

第五樂章 SKINNEDNESS（後書き）

「」覧頂き有難うございました。

更新遅くなりました。

すみません！

色々書きたかったのですが、上手くまとまらないので今回は「」までにしておきました。

第五樂章は、荒井のマメをやら、「宏紀のボケつぶりやり」を書きたかったので、「」んな形になりました。

作者自己紹介の欄に更新情報など載せておりますので、宜しければそちらも「」覧ください。

ご意見・「」感想など頂けますと嬉しいです。

第六樂章もよろしくお願ひします。

第六樂章 ſ h a m p e n g a ~ (前書き)

荒井の家に行つた宏紀。

彼は宏紀のために、楽譜を集めてくれたようだつた。

第六樂章　～happening～

「で？何？結局付き合つてんの、お前ら。」

昼休み。今日は西村と結城と一緒に昼食をとつていた。教室の後方で、聞き捨てならない言葉が吐かれる。

「ゴフツ！！」

西村の突拍子もない質問に、僕は飲んでいた麦茶を盛大に噴き出した。

慌てて荒井が教室に居ないかを確認をする。

汚いの何のと文句を言われるが、そんなことは関係ない。

「何言つてんの？！そんなわけないでしょ。」

口元を拭いながら僕は答える。

「宏紀、顔真っ赤。」

慌てて両手で頬を隠す。西村が余計なこと言うのが悪いんだろ！

「だつてわざわざ家にまで招待されたわけだろ？しかも楽譜がどうのとかいう理由で。」

「そうだね、音楽室でも済む話だよね。」

惚気にしか聞こえないんですけど、と続ける結城。

西村と結城は僕と荒井の関係を前々から疑っていたようだ。

「あれは、楽譜をたくさん持つてくるのは大変だから呼んだんだって荒井が言つてた！」

ムキになつて返すと、一人から意味深長な目線を送られた。

昨日、初めて荒井の家にいった僕は、恥ずかしい間違いをし、「天然」のレッテルを貼られたのだ。

そのことをついさつき、この友人一人に話したところ、このよくな事態に発展した。

もちろん、荒井がピアノを弾くことを話してもいいと、彼から許

可は取つてある。

「それに、男同士なんだから、そんなの有り得ないよ……って、なんだよ……。」

二人の視線に居心地の悪さを感じ、少し後ずさる。

「まあ、別に俺は男同士だからって否定する気は無いからさ。話す気になつたら話せよ。」

西村が勝手なことを言いながら、パンをほお張る。

だからそんなんじやないんだつてば……。

僕の言葉は彼らには届いていない様子だ。

「付き合ってるのどいつのは置いといで……、実際、荒井の雰囲気柔らかくなつたよね。」

「そうなの?」

確かに、僕にはよく笑いかけるようになつてきたけど。

客観的に見る余裕がないため、僕にはその変化はよく分からぬ。

「ああ、絶対そう。お前の影響受けてるんだろうな。」

僕が荒井に少なからず影響を与えていたらしい。何だか嬉しいような恥ずかしいような、変な気分だ。

僕は、荒井は絶対に損をしていると思うんだ。

もともとカツコイイから、笑うとますます素敵になる。

あんなにピアノが上手に弾けるんだから、もっとみんなの前で弾けばいいとも思う。

もつともつと、そういう面を出していけば、あの近寄りがたいイメージなんてどこかにいつてしまふはずだ。

そうしたら、多少口下手だつてクラスの輪に入れると思つ。

そうなつたら良いのに、と思つ反面で、やっぱり一人の秘密めいたものが壊れるのは嫌だと思う自分も居る。

嫌なジレンマ。

心の中で呟いた。

自分がいかに心の狭い人間かつて分かるよつだ。

僕は一人にはれないように、小さくため息を吐いた。

「おい、山中。」

クラスメートの一人が、僕の名前を呼んだ。
弁当を片付けかけていた手を止め、声の方に目を移す。
教室のドアに他クラスの女子が来ていた。どうやら彼女が僕を呼んだらしい。

女の子からの呼び出しなんて珍しいため、僕は少し期待してしまった。

「なになに、お呼び出し?」

茶化す西村の背中を軽く一発叩き、腰を上げた。

僕を呼び出した女の子は、わりと小柄でかわいく、真っ黒の髪の上品そうな子だった。

クラスメートの視線が気になつたので、とりあえず場所を移し、人気の少ないところに来た。

「どうしたの?」

と、僕。

彼女はなんだか言いづらそうにしてる。

「……あの、山中君って荒井君と仲良いよね?」

「荒井?うん、仲良いかな。」

何で荒井の話が出てくるんだろう、と思つていると彼女がついつと手紙を差し出した。

「これ、渡してもらえないかしい。」

差し出された手紙を受け取ると、そこには、荒井君へ、と書かれていた。

彼女は僕に、荒井との橋渡しになつて欲しいようだ。

「でも、これ……。」

「よろしくね!」

そういうと彼女は走り去つていった。

こういうのって本人に渡せばいいんじゃ……。

僕の思いは無視されたようだ。

それに何だか、これを荒井に渡したくないっていう気持ちが有る

んだ。

もっこりがきっかけで、荒井とあの子が付き合つだしたら…

…？

あの子は可愛くて、荒井と並んだらきっとお似合いだらう。そして荒井の笑顔は彼女に向けられたるんだ。その時僕はどうあればいいんだろう。

「なんなんだらう、この気持ち……。」

僕は解せない気持ちを抱えながら、呆然とその手紙を眺めていた。

第六樂章 ～ハマツコニク～（後書き）

「Jリード」で「J覧頂き有難う」やったよ。

「Jリード、一発波乱を…」と思いまして、女の子投入してみました。
これで一気に進めることが出来たら良いのですが…
私自身、どう動いていくか明確ではないので。笑

次回もよろしくお願ひいたします。

ご意見・ご感想など頂けますと、うれしいです。

第七樂章 *S a w a r e n e s s* (前書き)

荒井に手紙を渡して欲しいと頼まれた宏紀。
断ることもできず、受け取つてしまふが……。

第七樂章 Awareness

手にした手紙に頭を悩ませながら、僕は数学の授業を受けていた。荒井が女子に人気があるのは知っていたけど、まさかこんな役目を自分がすることになるとは、思つてもみなかつた。ただでさえ苦手な数学なのに、授業もまともに聞ける状態ではない。

家に帰つたら自力でやるしかなさそうだ。

手紙のこともあるし、悩みの種は増える一方だ。

「ああ！ もう！」

机に頭をつけ、両手で頭を抱える。

「わけわかんないよ……。」

「なんだ、山中。分からぬのか？」

自分でも気付かないうちに口に出していたらしい。

先生に言われて、僕は慌てて顔を上げ、首を振った。クラスメートもこちらを見て、面白そうにしている。

クラスに笑い声が溢れた。

恥ずかしくなつて縮こまる僕、一いつ矢を見ていた荒井と目が合つて、クスリと笑われた。

今日は最悪だ……。

机に伏して荒井の横顔を盗み見ながら小さくため息をついた。

僕は、長い長い数学の時間を、手紙とにらめっこをしながら過ごしたのだった。

放課後、今日もいつも通り部活に向かつ。

手紙はまだ、僕の手元にある。

渡すチャンスがなかつたわけではないけれど、どうしてもその話題を出すことができなくて。

気付いたら放課後だったのだ。

どうしよう。

胸の辺りにつつかえを感じる。

心の中にもやもやとした黒い塊が巢食つているようだ。

鞄と道着が入っている袋を手に渡り廊下を歩いていると、以前と同じように荒井の姿を見つけた。

音楽室の窓から見える彼の姿。

ここで彼を見たのが始まりだった。

彼の暖かい音色。

大きな手。

優しい笑顔。

思い出たちはキラキラ輝いている。

なぜか切ない思いが込み上げて、僕は逃げるよつて渡り廊下を後にした。

制服を脱いで道着に着替える。

ストレッチをして、メニュー通りにランニングから始めた。

校舎の周りをぐるりと走る間も、僕の頭の中はあの手紙のことでいっぱいだった。

渡してくれと頼まれて、半ば強引に渡されたとはいえ引き受けてしまつたのだから、渡さないわけにはいかない」とくらい分かってるんだけど。

どうしても心が言うことを聞かない。

手紙を渡すだけなのに、なんでこんなに嫌なんだろう。妙な苛立ちを払うかのように、僕は足を動かした。

風を切つて突き進む。

呼吸の音が聞こえる。

無我夢中で走った。

何かに追われているかのよつて。

その中に微かに聞き覚えのある音。

荒井のピアノ。

『お前ら付き合ってんの？』

ふいに、西村の言葉がフラッ シュバッくした。
動かしていた足が遅くなる。

あれ？

両足が地面についた。

僕、もしかして……。

心臓の音だけが聞こえた。

第七樂章 *~ awareness ~* (後書き)

「ご覧頂き有難うございました。」

今回は「自覚」をテーマに書きました。
自分の気持ちに気付いた宏紀は、手紙をどうするのか。
次回ではその辺に触れて書きたいと思います。

ご意見・ご感想頂けますと、うれしいです。

第八樂章 Sim pos si ble~ (前書き)

女の子から荒井宛の手紙を託されたことで、荒井に対する気持ちを自覚した宏紀。

この手紙をどうしたらいいのか、ジレンマに苛まれる。

第八樂章 impossible

荒井が好き。

そのことに気付くと、今まで不可思議だった自分の感情全てに説明がついた。

彼と秘密を共有したいこと。

頭を撫でられて嬉しくなること。

手紙を渡すことへの苛立。

「僕は、荒井が、好き……。」

男同士なのに？

真っ暗闇に放り投げられた感覚に陥った。

足に力が入らない。

頭の中が混乱し、呼吸が乱れる。

立っているのがしんどくて、その場に膝をついた。

後ろから部員の足音が聞こえてくる。

立たないと、走らないと自分を叱咤するが、身体が言うことを聞いてくれない。

誰かが僕を呼んでいる声が聞こえた。

「おい！山中？どうした！」

軽く肩を揺すられる。部長だった。

「……すいません。」

大丈夫ですから、と足に力を入れようとして失敗した。

「おいおい、大丈夫か？」

今日は帰ったほうがいいな、と言いながら部長が肩を貸してくれた。

部長にもたれながらすみませんと呟くと、部長は気にするなど言うかのように、僕の背中を軽く叩いた。

僕って弱い。

自己嫌悪に陥りながら道着を脱ぎ捨てる。

はあ、と大きなため息を一つ吐いて、ワイシャツに腕を通した。ボタンを留めながら考える。

荒井への気持ちに気付いてしまった以上、この手紙は渡さなければならぬ。

渡さなかつたら変に思われる。やきもちを妬いたのがばれてしまふ。

でも、渡したくない。でも、渡さなきゃ。でも、渡したくない。どうしようもないジレンマに押しつぶされそつだ。

僕もこの子のよう、女の子だったら……。

考えても仕方のないことだけ。

視界が霞む。頬を暖かいものがつたつた。

掌で無造作に擦りあげ、僕は決心した。荒井に手紙を届けようと。鞄を掴み、決心の鈍らないうちにと足を速める。

油断したら涙が溢れてきそうで、僕は唇を噛み締めた。

僕は男だから。

この恋に蓋をしなければ。

音楽室に続く階段がやけに長く感じた。

渡り廊下を走る。窓に荒井の姿が有つた。

胸がキリキリと痛む。それに気付かないフリをして、僕は前を見た。

音楽室の扉。その向こうに荒井がいる。

手をドアノブに掛けて、瞼を落とす。深呼吸を一つ。全身の力を抜いた。

意を決して右手に力を入れる。

扉を押し開け、足を踏み入れると、そこには普段と変わらない荒井の音があった。

「山中？」

僕の姿を見つけ、荒井の手が止まつた。

部活はどうしたのかと問われ、僕は言葉を濁した。

彼への想いの後ろめたさからか、荒井の目をまともに見ることが

できない。

そんな僕の態度を不信に思つたようで、荒井がこちらに近づいてくる。

「どうしたんだ。何か有つたのか？」

手紙、渡さなきや。

僕は鞄を乱暴に机の上に置き、その中を漁り始めた。

荒井は驚いた様子で呆然と僕を眺めていた。

手紙を見つけ、それを掴む。

心の中にはいまだにジレンマが巣食つているが、僕はそれを無視して手紙を取り出した。

「これ。頼まれた。」

それだけ言い、荒井の胸に手紙を押しつける。

荒井が僕の手から手紙を取つたのを見て、またチクリと胸が痛んだ。

「……頼まれた？」

コクリと頷く。

「……そうか。」

荒井が呟いた。その声が、何かいつも違つた響きを持つていたので、僕は思わず顔を上げた。

そこには荒井の複雑な顔があつた。

「あ、荒井？」

初めて見るその表情に、僕は慌ててしまつた。
彼は手紙に視線を移し、おもむろに口を開いた。

「お前は……。」

「え？」

僕が聞き返すと、荒井は頭をゆっくり振つた。

「やつぱり良い。」

そう言つて荒井は自分の鞄に手紙を入れ、僕の方を全く見ずに

アノに向き合つた。

激しいピアノの音に満ち溢れた音楽室は、何故か居心地が悪く、

までも僕を拒絶するかのよつた背中を見ながら、そこを後にした。

第八樂章 Simpossibles（後書き）

「ご覧頂き有難うございました。

あと少しで完結できるかと思います。

「ご意見・ご感想を頂けますと嬉しいです。

第九樂章 *s o l i d a r i t y* (前書き)

預かつた手紙を荒井に渡した宏紀。

荒井は手紙の子と付き合つてしまふのだろうか。

第九樂章 Satisfactory

その日の夜、夢を見た。

真つ暗な世界に、仲睦まじそうに寄り添う二つの影。荒井があの女の子の肩を抱き歩いている姿が見えた。

手を必死に伸ばして、必死に走って、彼の名前を呼ぶけど彼は振り向かない。

絶望と孤独感の中で、僕は走るのをやめ、腕を力なく下ろした。しどしどと止めどなく降り注ぐのは、雨なのか、それとも、涙なのか。

「最悪だ……。」

明け方5時。起きるには早すぎる時間だ。

気分の悪い目覚めに、僕はごろりと寝返りを打った。

枕には泣いた跡がある。

昨日は色々なことがあった。思い出したくないことがばかりだ。心がキリキリと痛む。

目頭が熱くなってきた。

「学校行きたくない。」

枕に顔を擦りつける。

夢の中のように、あの二人が寄り添う姿を見てしまったら、僕は普通にしていられるだろうか。

無理だよな、と自虐めいた笑いができる。

それに……。

手紙を渡した時に見せた、荒井の表情も気になる。何か言いかけたことも……。

あれは一体なんだつたのだろうか。

答えの出ないまま、僕は布団の中にもぐりこんだ。

僕の心配をよそに、午前中はいつも通りの生活が待っていた。
ただ違うのは、僕が荒井を見れないこと。

どうしても目が合わせられない。

彼を好きになってしまったということが、僕に自責の念を与える。

男同士なのに。

今まで経験したことのない想いに、僕は完全に押し潰されていた。
授業はろくに耳に入らないし、昼休みも僕の状態は相変わらず最悪だった。

荒井が教室を出たのを確認し、肩の力が抜ける。

しかし、胸の辺りにあるもやもやのせいで、ご飯もろくに喉を通らない。

仕方なく僕は早々に弁当の蓋を閉めた。

「宏紀、風邪か？」

西村が眉間にしわを寄せて僕の顔を覗き込む。

「え？ 違うよ。」

曖昧に笑つて返すと、西村が僕の額に手を当てた。もう片方の手を自分の額に持っていく。

「熱は……ないかな？」

「大丈夫だから。」

と言つても西村も結城も聞いていない。

心配だからとりあえず保健室に行けと言われて、しぶしぶ立ち上がりつた。

本当は教室に居たほうが気が紛れるんだけど、一人に言われたら仕方がない。

薬だけもらつてくる、と言つて僕は教室を後にした。

心配性だなあ、と苦笑を洩らす。

でも、二人の気遣いが心地よかつた。

保健室に行こうと階段を下りていると、見慣れた影が目に映つた。

荒井だ！

慌てて階段を上り、防火扉の裏に隠れる。

頼むからこっちはに来ないでくれ！

足音と話し声が聞こえる。荒井の声ともう一つは女の子の声。

嫌な予感がした。

緊張の中、二つの足音が階段を上に行くのを確認し、僕は恐る恐る階段へ視線を走らせた。

彼らはちょうど踊り場に居り、曲がった際に女の子の顔が見えた。やはり、手紙の女の子だつた。

彼女はキラキラと荒井に笑いかけていた。

そつか、荒井はあの子と……。

視界が霞む。

ゆっくり足を進める。

もう、どこに行つたら良いのかも分からなかつた。
まるで今朝見た夢のようだ、と頭の片隅で思いながら僕は力無く足を動かす。

ふと気付くと上履きのまま校舎の裏側に来ていた。

僕は芝生の上に腰をおろした。

校舎に背を預け、ただ空を見上げる。

どんよりとした灰色の雲が校舎を覆つっていた。

氣づいた途端に終わる恋。あつけなく散る桜みたいだ。

もう、音楽室に行くこともないんだ。あそこは彼女の場所になる。

目頭が熱くなり、零がこぼれた。

僕の頬に水玉がつたう。

ぱつぱつと制服に染みができる。

嗚咽が込み上がる。

僕は膝を抱え、肩を震わせた。

遠くでチャイムの音が鳴つた。

どのくらいそうしていたのだろう。

灰色だった雲は真っ黒に変わり、今では雨が降つていて。

雨で張り付いたシャツが冷たくて、僕は身震いした。
さつきの鐘は、始まりのものなのか、終わりのものなのかすら分からなかつた。

「とりあえず、戻らなきゃ……。」

まだ視界は霞むけれど。

校舎の壁に手をついて身体を支える。

すっかり冷えてしまつた身体をさすりながら、僕は教室を目指した。

降り注ぐ雨は止む気配が無く、僕の髪からは雫が落ちる。
シャツも絞つたら水が出そうだ。

校庭はすっかりぬかるんでいて、上履きとズボンのすそに茶色い模様をつける。

こんなんで校内に入つたら、怒られるかな。
ハッキリしない意識の中でそんなことを考える。

校内に入り、教室を目指す。

授業中なのだろう、廊下には先生の声しか聞こえない。
階段を上り、自分の教室の後ろのドアに手を掛けた。

ドアにある小さな窓から、教室の中が見えた。

その窓際に荒井の横顔が見え、僕の心はまた痛みを覚えた。
いつも通りの風景。なのに、何故か違和感を感じる。

僕の心が普段とは違うからなのだろうか。

どうしようもない孤独感に襲われて、僕はドアから手を離した。

第九樂章　*disappointment*（後書き）

ここまでお読み頂き、有難うございました。

次回で最終話です。

最後までお付き合っていただけたらと思います。

ご意見・ご感想頂けますと、嬉しいです。

第十樂章 ～end～（前書き）

荒井と手紙の女の子が並んで歩いているところを見て、一人が付き合いか始めたことを悟つた宏紀。

ショックのあまり教室に戻ることも出来ず、雨の中家路についた。

第十樂章　～end～

自宅へ戻り、家族はまだ帰っていなかつた。

傘も差さずに帰ってきたため、玄関にはあつといつ間に水溜りが出来た。

濡れ鼠で、しかも泣きはらした田をしてくる僕。

こんな格好を家族に見られたら、何を言われるか分かつたものではない。

誰も居ないことに安心を覚えた一方で、なぜか寂しさも覚えた。

「……お風呂、入らなきや。」

とりあえず冷えた身体を温めようと風呂に入つたが、思考はマイナスに働くばかりで、湯船につかりながらも気を抜くと涙が出そうになる。

じつとしているといやな事ばかり考えてしまつため、早々に浴槽から出たせいか、風呂に入つても身体は冷たく、背筋を走る悪寒が止まらない。

「風邪でも引いたかな……。」

心なしか鼻声になつていてもよつた氣もある。

わしゃわしゃと髪をタオルで拭き、パジャマに腕を通した。

リビングにある薬箱の中からそれらしい物を探し、とりあえず飲む。

気休めぐらしにはなるだらつ。

羽毛布団でも引っ張り出して寝よつか、と考えているトインター

ホンが鳴つた。

「誰だよ、こんなときだ。」

勧誘だつたら追い払つてやる、と思ひながらカー・ディガソを羽織つて廊下を進む。

「はい、おまたせ……。」

ドアを開けて田線を上に移すと、そこに居たのは荒井だった。

「な……っ！」

なんで居るんだ！

反射的にドアを閉めようとしたが、彼の手にそれを阻まれる。僕が怯んだ隙に、荒井が無理やり玄関に入ってきた。

「あ、荒井！ なんでこんなとこに。」

荒井が後ろ手で鍵を掛けた。

ガチャリと音に身が竦む。

「これ。」

ついっと差し出されたのは、僕の鞄だった。学校に置いて帰ってきたのを、わざわざ届けてくれたようだ。

「あ、ありがと。」

素直にお礼を言つたが、やはり田は合わせられなかつた。

「山中……。」

そつと頬に触れられた。親指が僕の頬をさする。そんな動作一つに、僕は反応してしまつ。

「お前、泣いた？」

ビクッと肩を震わせて、僕は一步後ずさつた。

「泣いてないよ。」

明らかに嘘と分かるのに、口をついて出たのはそんな言葉。

荒井は何も返さない。沈黙が痛い。

それを破つたのは荒井だつた。

「上がる。」

「え、ちょっと待つて。」

僕の制止も虚しく、荒井はずんずんと廊下を進んでいく。

その背中が、昨日の音楽室での彼の背中に重なり、胸がずきんと疼く。

「ねえ……、荒井……。」

お願いだから困らせないで。これ以上泣かさないで。

リビングに入った荒井がこちらを振り返つた。

視線が交わり、僕は思わず目を逸らしてしまった。

「どうしたんだ、お前。」

荒井の視線がまっすぐ僕を射抜く。

どうしたものもこうしたも無いだろうと、心中では思つていても口に出すことはできない。

僕が話そうとしないので、荒井はため息を吐いたようだった。

「いつにこい、と言つかのように手をとられ、されるがままに僕はリビングのソファーに腰を下ろした。

三人掛けのソファーの端と端に座った僕達の間に、表現しがたい空気が漂っていた。

チラリと横を盗み見ると、荒井はまっすぐ前を向いて座り、膝の間で指を組んでいた。

「鞄は置きっぱなしだし、泣きはらした目はしてるし。……俺と目も合わさない。」

何かしたか、と繋げられた言葉にドキッとする。

「荒井は、悪く、ない。」

膝の上で手を握り締めながら答えた。

「……気にしないで。」

好きな荒井の幸せを祝つことも出来ないわがままな僕がいけないことは分かっている。

こうなるのが嫌なら手紙を渡さないという選択肢もあったのに、それを選ばなかつたのは自分なのだ。

だからこういう態度はしてはならない。

思つたそばから、視界が霞んできた。

「いや、俺が原因だ。」

決め付けたように言つ荒井の声に、僕は思わず顔を上げた。上げた顔を、大きな手で包み込まれる。

この手であるの子に触るんだ。

仕方の無いことなのに、視界がますます霞んできた。

荒井の顔の輪郭がぼやけてくる。

触れられている場所から熱が流れ、身体全体が熱くなつてくようだ。

なんだか頭もくらくらしてきた。

風邪が原因なのか、荒井への想いの熱さなのか。涙か一つこぼれた。

クリアになつた視界で荒井と田が合つ。

「荒井は……あの子と付き合つてるんでしょ?」

唐突に僕は聞いた。一日中、訊きたいが確かめることが恐かつたこのことを。

彼の目に驚きの色が映る。

その色を見て、やつぱり、と心の中で呟いた。

「何の話?」

「今日、見たんだ。一人で階段上つていぐといぐ。

思い出すと胸が疼く。キラキラ笑つた彼女の笑顔に、僕は勝てるはずがない。

荒井の手が頬から離れた。

「あれば」

「良かつたね。」

荒井の言葉を遮つて、僕は笑顔をつくつた。

「可愛い子でよかつたじやん。昨日の今日だから、こんなに早く付き合うとは思つてもみなくて、ちょっと驚いたけど。大事にしてあげないとね。」

捲くし立てるような僕の言葉に、荒井は呆然として聞いていた。何かを言おうとしていたが、僕はそれを許さなかつた。自分でも不自然なのは分かつているけど、言葉を繋がないと堪えきれなくなりそうで。

「音楽室にはもう」

「それで泣いたのか。」

荒井が僕の手を掴んだ。その思わぬ強さに、顔が強張るのが分かる。

「俺に彼女が出来た、つて。」

「何言ってんの、違うよ。そんなわけないじゃん、と言おうとして失敗した。」

作り物の笑顔は壊れ、両目からは涙があふれてくる。

「山中……。」

荒井の優しい声がする。

そんな理由で泣いてたわけではないと言いたいのに、声が出てこなかつた。

みつともなく嗚咽を洩らし首を振つていると、荒井の腕が伸びてきて、僕を正面から包み込んだ。

荒井の心臓の音がする。

一瞬、涙が止まつた。

「お前の誤解だ。」

耳元で彼の声がする。

「……『ごか、い？』

ぽろぽろ落ちる涙は荒井の服に吸い込まれていく。

「何が、誤解、なの？」

しゃくりあげながら訊くと、彼は少し笑つたようだつた。

「あの子と付き合つてない。話しただけ。」

彼女なんていないという荒井の言葉に、僕は目を見開いた。

状況を掴めずになると、荒井が身体を離し、僕の肩をつかんだ。

「お前の勘違いだよ。」

覗き込みながら、真摯な眼差しを向ける荒井の顔。

僕の勘違い……？

じゃあ、あの子の笑顔は？あれは何だつたの？

「嘘ばっか……、あの子笑つてたじやん。だつて……。」

少なくとも僕は、失恋した相手とあんなふうには話せない。

「彼女は俺のピアノが聞きたかつたんだつて。」

予期せぬ言葉に耳を疑つた。

「俺が音楽室に入るところを見たらしい。付き合つてくれないな

ら、一度で良いから私のために弾いてくれないかって。そう言われて断れないだろ。」

「ピアノを……？」

「そ、すごく喜んでた。」

僕が見たのはその帰り道だったのかもしれない。

荒井は彼女を選ばなかつた。あの子には悪いけど、それがとても嬉しくて、安心して、目頭がまた熱くなつてきた。

両手で顔を覆い、胸が空になるくらい息を吐き出した。

「良かつた……。」

「何が？」

小さく呟いたそれを聞きどがめられて、動転した僕の顔を大きな手が包み込み、ぐいっと顔を上げさせられた。

荒井の微笑と僕を呼ぶ声が耳に入った。

荒井の顔をまともに見れなくて、目を力いっぱいぱいつむつていると、ふにゅつと暖かいものが頬に触れた。

びっくりして目を開くと、荒井の優しい笑顔がそこにあつた。

僕が最初に惹かれた、あの柔らかい笑顔。

「山中。……お前が好きだ。」

好きだと繰り返されて、僕は頭が真っ白になつた。

荒井が、僕を、好き？

見上げた先には、まっすぐな瞳があつた。それが嘘でも幻でもなすこと教えてくれる。

「でも、僕、男だよ？」

「そうだな。」

「……いいの？」

「何が悪いんだ。」

そういつた彼の顔は柔らかな笑みをまとっていて、僕は思わず荒

井に抱きついた。

背中に腕が回される。

「男でも女でも、お前はお前だる。」

彼の言葉が信じられないほど嬉しくて、僕の目にはまた涙が溜まつてきた。

「荒井……僕、僕ね。」

「ぽとぽと涙が落ちる。」

「荒井が好きなんだ。」

背中に回された腕に力が入る。

「俺も……。」

少し照れた声に後押しされて、僕も腕に力を入れた。いつの間にか、ずっと胸につっかえていた塊は無くなってしまつた。

荒井から離れたくないで、僕は頭を彼の胸に押し付けた。

「どうした？」

なんでもない、といつも同じく頭を軽く振った。

僕の頭を撫でる荒井の手が気持ちいい。

さっきまでの荒んだ気持ちが嘘のようだ。

「また来いよ、音楽室。」

顔を上げると荒井と田が合つた。

頬に手が添えられる。

「お前のために弾くからや。」

僕は微笑んで、いくつと頭を、ゆつべつと田を開じた。

～END～

第十樂章　～end～（後書き）

ここまで「」覧頂きありがとうございました。
なんとか、最後まで書くことが出来ました。
編集および番外編も書いていきたいと思しますので、よろしくお願
いします。

『旋律を奏でて』はいかがだったでしょうか。
「」意見・「」感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9733e/>

旋律を奏でて

2010年10月12日13時57分発行